

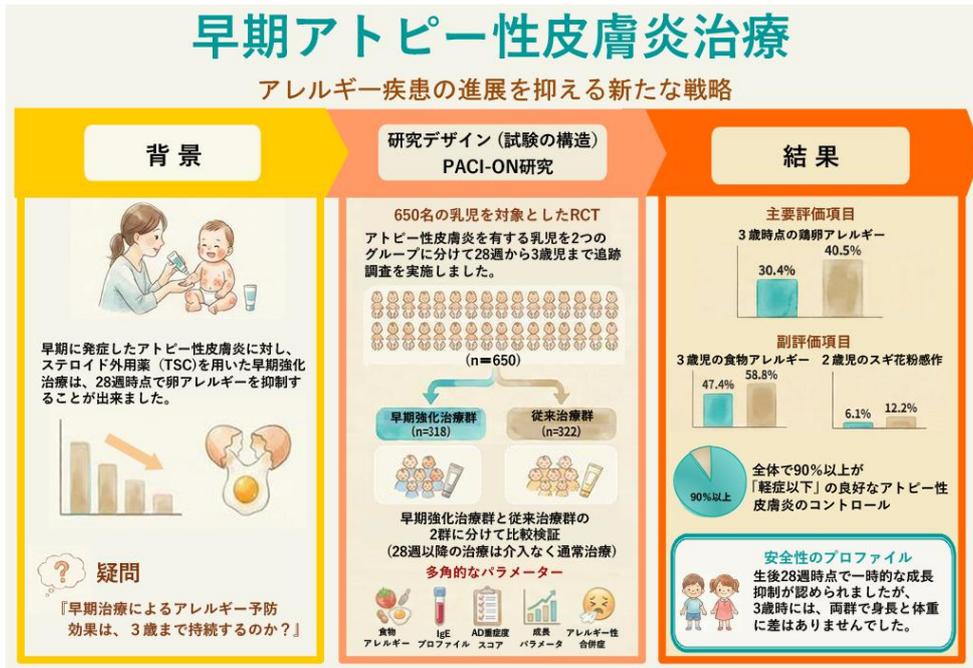
# PRESS RELEASE

報道関係者各位

2026年3月17日  
 国立成育医療研究センター  
 名古屋市立大学  
 大阪はびきの医療センター  
 近畿大学  
 山口大学  
 国立病院機構 三重病院  
 千葉大学医学部附属病院  
 藤田医科大学  
 公立昭和病院  
 名古屋大学  
 秋田大学

## 乳児期のアトピー早期強化治療、3歳時点でも食物アレルギーを抑制 ～早期介入で卵アレルギーも有意に減少～

国立成育医療研究センター（所在地：東京都世田谷区大蔵、理事長：五十嵐隆）アレルギーセンターの山本貴和子、名古屋市立大学の太矢幸弘、大阪はびきの医療センターの亀田誠、近畿大学医学部の竹村豊、山口大学の長谷川俊史、三重病院の藤澤隆夫、千葉大学の山出史也、藤田医科大学ばんだね病院の近藤康人、公立昭和病院の川口隆弘、名古屋大学の秋山真志、秋田大学の河野通浩らの研究チームは、乳児期早期に発症したアトピー性皮膚炎に対する早期強化治療が、3歳時点でも食物アレルギーの有病率低下と関連することを、多施設共同ランダム化比較試験<sup>1</sup>に基づく長期追跡研究として世界で初めて明らかにしました。本研究成果は、国際雑誌 The Allergy に掲載されました。



【図：今回の研究の全体像】

<sup>1</sup> 多施設共同ランダム化比較試験とは、複数の医療機関が連携し、患者さんをランダムに治療群へ割り当てて効果を検証する研究手法のこと。

# PRESS RELEASE

## 【プレスリリースのポイント】

- 乳児期早期に発症したアトピー性皮膚炎に対し、早期から炎症を十分に抑える治療を行った早期強化治療群の子どもは、3歳時点でも食物アレルギー（特に鶏卵アレルギー）の有病率が有意に低いことが分かりました。
- アトピー性皮膚炎は、早期強化治療群と従来治療群の両群とも90%以上が軽症以下で良好なコントロールが維持できていました。
- 2歳時のスギ花粉感作は、早期強化治療群が、従来治療群と比較して、有意に低い傾向を示しました。
- 成長（身長・体重）については、3歳時点で両群に差はないことが確認されました。
- 乳児期早期からのアトピー性皮膚炎治療が、アレルギー疾患の進展を抑える新たな戦略となる可能性を示しています。

## 【研究の背景】

アトピー性皮膚炎は、乳児期に最初に現れることの多いアレルギー疾患であり、その後、食物アレルギーや喘息、アレルギー性鼻炎へと進展する「アレルギーマーチ」の出発点と考えられています。皮膚のバリア機能が障害されることで、皮膚からアレルゲンが侵入し、感作が起こることが近年明らかになってきました。

本研究グループはこれまでに、多施設共同ランダム化比較試験にて、乳児期早期のアトピー性皮膚炎に対して炎症を十分に抑える治療（早期強化治療）を行うことで、生後28週時点の鶏卵アレルギーを有意に減少させることを報告しました（<https://www.ncchd.go.jp/press/2023/0410.html>）。今回、その効果が3歳まで持続するのかを検証しました。

## 【研究概要】

- 本研究は、全国多施設で実施されたランダム化比較試験（PACI試験）に参加した乳児を、3歳まで追跡した前向きコホート研究（PACI-ON研究）です。
- 生後7～13週でアトピー性皮膚炎と診断された乳児650名（全国16施設）を、
  - 早期から積極的に炎症を抑える「早期強化治療群」（プロアクティブ療法）
  - ガイドラインに沿った「従来治療群」（リアクティブ療法）の2群に無作為に割り付け、生後28週まで治療を実施しました。
- その後は通常診療を行い、3歳まで食物アレルギー、皮膚症状、アレルギー性疾患、成長などを評価しました。

## 【主な研究結果】

- 3歳時点の食物アレルギー全体の有病率は、早期強化治療群47.4%、従来治療群58.8%と、早期強化治療群で有意に低下していました。

## PRESS RELEASE

この差は主に、生後 28 週時の負荷試験における鶏卵(生卵)アレルギーの既往が少なかったことによるものと考えられ、早期の耐性獲得が示唆されました。

- 生卵アレルギーの既往は、早期強化治療群 30.4%、従来治療群 40.5%と、有意な差が認められました。

なお、ほぼすべての子どもが 3 歳までに何らかの加熱卵を摂取可能となっていました。

- アトピー性皮膚炎の重症度は両群で同等で、90%以上が軽症以下でした。全身療法が必要となった子どもはいませんでした。
- 生後 28 週時に認められた身長および体重の差は、3 歳時点では消失していました。
- 喘鳴、喘息、アレルギー性鼻炎の発症率に有意な差は認められませんでした。2 歳時のスギ花粉感作は、早期強化治療群が従来治療群と比較して有意に低い傾向を示しました。

### 【発表者のコメント】

本研究は、乳児期のアトピー性皮膚炎に対して早期から十分に炎症をコントロールすることが、食物アレルギーの長期的な予後やアトピー性皮膚炎のコントロールに影響を与える可能性を示しました。皮膚治療による十分な湿疹のコントロールと適切な食物導入を組み合わせることで、アレルギー疾患の進展を抑える新たな予防戦略につながることを期待されます。

### 【特記事項】

本研究は、日本医療研究開発機構 (AMED) 免疫アレルギー疾患実用化研究事業、乳児期早期発症のアトピー性皮膚炎を追跡しアレルギーマーチへの影響を探索する前向きコホート研究 (PACI-ON コホート) の支援を受けて実施しました。

### 【発表論文情報】

題名 : Three-year follow-up of the PACI randomized controlled trial (PACI-ON) : effects of early intervention for atopic dermatitis on atopic march

著者 : 山本貴和子 (責任著者)<sup>1</sup>、齋藤麻耶子<sup>1</sup>、佐藤未織<sup>1</sup>、石川史<sup>1</sup>、豊國賢治<sup>1</sup>、犬塚祐介<sup>1</sup>、谷口智城<sup>1</sup>、小笠原久子<sup>1</sup>、島田真実<sup>1</sup>、樺島重憲<sup>1</sup>、飯倉克人<sup>1</sup>、土屋邦彦<sup>2</sup>、森元真梨子<sup>2</sup>、峠岡理沙<sup>2</sup>、益田浩司<sup>2</sup>、細井創<sup>2</sup>、加藤則人<sup>2</sup>、亀田誠<sup>3</sup>、高岡有理<sup>3</sup>、重川周<sup>3</sup>、竹村豊<sup>4</sup>、徐アレキサンダー<sup>5</sup>、佐藤さくら<sup>5</sup>、海老澤元宏<sup>5</sup>、糸永宇慧<sup>5</sup>、長谷川俊史<sup>6</sup>、脇口宏之<sup>6,7</sup>、藤澤隆夫<sup>8</sup>、金井怜<sup>8</sup>、山出史也<sup>9</sup>、中野泰至<sup>9</sup>、夏目統<sup>10</sup>、安岡竜平<sup>10</sup>、近藤康人<sup>11</sup>、森雄司<sup>11</sup>、川口隆弘<sup>12</sup>、二村昌樹<sup>13</sup>、杉浦一充<sup>14</sup>、北沢博<sup>15</sup>、濱畑裕子<sup>16</sup>、秋山真志<sup>17</sup>、河野通浩<sup>18</sup>、朴慶純<sup>1</sup>、福家辰樹<sup>1</sup>、小林徹<sup>1</sup>、斎藤博久<sup>1</sup>、Hywel C. Williams<sup>19</sup>、大矢幸弘 (AMED 開発代表者)<sup>1,14,20</sup>

所属名 :

- 1) 国立成育医療研究センター (東京都)
- 2) 京都府立医科大学大学院 医学研究科 (京都府)

## PRESS RELEASE

- 3) 大阪はびきの医療センター (大阪府)
- 4) 近畿大学 医学部 (大阪府)
- 5) 国立病院機構 相模原病院 (神奈川県)
- 6) 山口大学大学院 医学系研究科 (山口県)
- 7) 大分大学 医学部 (大分県)
- 8) 国立病院機構 三重病院 (三重県)
- 9) 千葉大学大学院 医学研究院 (千葉県)
- 10) 浜松医科大学 (静岡県)
- 11) 藤田医科大学 ばんたね病院 (愛知県)
- 12) 公立昭和病院 (東京都)
- 13) 国立病院機構 名古屋医療センター (愛知県)
- 14) 藤田医科大学 医学部 (愛知県)
- 15) 東北医科薬科大学 (宮城県)
- 16) さいたま市立病院 (埼玉県)
- 17) 名古屋大学大学院 医学系研究科 (愛知県)
- 18) 秋田大学大学院 医学系研究科 (秋田県)
- 19) Lifespan and Population Health, University of Nottingham (英国)
- 20) 名古屋市立大学大学院 医学研究科 (愛知県)

掲載誌 : The Allergy

DOI: <https://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/all.70262>